すぺえすぱる特集

真下飛泉の詩（ましもひせんのうた）

「戦友」100年

■真摯な教育者そして明星派歌人であった真下飛泉

真下飛泉（本名・瀧吉）は、明治11年（1878）10月10日、京都府加佐郡河守町（現在大江町。近く福知山市と合併予定）の農家の二男として誕生しました。地元の尋常小学校卒業後、近所の糸問屋に奉公に出されましたが、町に高等小学校が設立されると、向学心に燃える飛泉は、貧農に学問など不要という父の反対を押し切って進学。校長小墻近太郎の寝食を忘れて教育に打ち込む姿に強い影響を受け、将来教育者になろうという気持ちが芽生えました。

明治32年（1899）3月、飛泉は京都府師範学校を卒業し、京都市有済尋常小学校の訓導となりました。就職と同時に、大阪の投書家青年達が結成した浪華青年文学会（後　関西青年文学会）に参加し、機関誌「よしあし草」に次々と小説を発表し、在学中同様、「文庫」にも投稿していました。

明治33年（1900）4月、与謝野鉄幹主宰の「明星」が発刊されると、飛泉はその第8号（明33・11）から、明治36（1903）7月の卯歳第7号まで、51首の短歌を発表しています。

山多き丹波の国の朝霧は物を
思ひて行くによきかな
（「明星」第10号　明34・1）

明治36年10月、飛泉は母校の附属小学校の訓導となった。文芸を愛好する師範校生らは、この小説や歌をつくる先生を歓迎し、飛泉を中心にして、「文友会」を結成し、「韻文朗読会」などを開いたりしました。明治37年（1904）2月、日露戦争が勃発するや、5月28日（地久節）の附属小学校での学芸会に、飛泉は受け持ちの4年生の児童に自作の「出征」という唱歌を、オペラ形式で歌わせました。農村青年の武雄が老父母を残して出征していくという内容で、集まった父母たちに大変な感銘を与えて、歌詞を求める人が多く、唄本として印行することになったのです。これに力を得て、続編「露営」が書かれ、ついで「戦友」が作られました。14番までありますが、これに付けた三善和気の作曲もよく、たちまちの内に全国に広まっていき、真下飛泉の名を歌謡史に永久に留めることになりました。

大正14年（1925）5月、下京区選挙区から市会議員として立候補し、最高得点で当選。飛泉は市教育行政の「事毎に当を失し、亡状を窮めている」現状を正すのが使命と考えて行動しました。多忙を極め、これが持病の心臓病を悪化させ、大正15年（1926）10月25日、永眠しました。享年49歳（数え年）。「死にたくない。ああ死にたくない。」と言って亡くなったといいます。墓は知恩院境内にあり、顕彰碑は京都の東山の良正院前や大江町の美河小学校、宮川河畔にあります。（資料提供・溝口　宏氏）

世界平和の願いを祈る人々は同様に戦地に思いを馳せます。平和な国々ばかりではない。そうした国土が戦地にならないことを切に願い、「世界が平和でありますように。」そんな願いをこめて、「戦友」の歌誕生100年を掲載しました。

『戦友』表紙
眞下飛泉作歌、三善和氣作曲『戦友』
（學校及家庭用言文一致叙事唱歌第三篇）
五車楼書店・刊　明治38（1905）☆
［京都教育大学所蔵］

多くの人に歌われた名曲「戦友」は今から100年前明治38年9月12日に刊行された。

■知恩院境内の「ここはお國を何百里」の歌碑

真下飛泉（本名・瀧吉）の「ここはお國を何百里」の歌碑は、郷里の大江町と、京都市東山知恩院境内に建てられています。知恩院の大きな「三門」の前の道を、北へ約150メートルほど行ったところの、知恩院の塔頭・良正院表門の前の植え込みの中に建っている大きな歌碑。実は、第二次世界大戦終了後、アメリカ進駐軍の兵士が、命令によって、この歌碑を「軍国主義をあおるもの」と理由付けて、破壊撤去するとやって来たといいます。

しかし、この時このお寺の当時の住職細井照道師は、この歌碑の前に立ちはだかって、「この歌が軍国主義をあおるものというのは、全くの誤解であり、この歌の真意は、戦争のかなしみを人々に伝え、かつ、極限の状態における人と人との友情を歌ったもので、それでこそこの歌が我が国で永く歌い継がれてきたものである。これだけ説明しても、なおこの歌碑をたおすというのであれば、その前に先ず私をたおせ」といわれたと伝えられ、この住職の真情にうたれた進駐軍の兵士たちは立ち去り、この住職のおかげで今日この歌碑はこの地に立ち続けているのです。

「ここはお國を何百里」歌碑

真下飛泉（1878～1926）と聞いても、今日ではその名を知る人はあまりいないのではないでしょうか。「ここはお国を何百里……」で始まる「戦友」の歌詞を創った人だといえば、「あの歌か」と思う人も少なくはありません。

ここはお国を　何百里
離れて遠き　満州の
赤い夕日に　てらされて
友は野末の　石の下

POWER 「ぱる編集室の窓辺」No.32

「戦友」の歌は、児童でも歌える優しい言葉で作られていた。今でいう大ヒット曲なのである、レコード大賞ものかもしれない。その歌が作られて100年にあたるという今、忘れ去られがちな平和へありがたさを思い起こしてみたい。

父母の戦争体験を聞いて育った人が団塊の世代といわれる人々で、どこかに間接的戦争体験をもっていると想像する。

なつかしいメロディーでもいいではないだろうか。かつては、歌手のアイジョージさんがニューヨーク・カーネギーホールで歌ったという。歌うという行為から、心に移ってゆくだろう。人に伝わるだろう。人間は心を言葉にし、歌う事ができる。それは素晴らしいパワーである。

京都市立修道（しゅうどう）小学校

開校 明治2年11月11日

〒605-0932　東山区東大路通渋谷下ル妙法院前側町440
電話 561-3397

校長	藤本　榮樹
教頭	中川　三郎
教職員	17人
児童	131人

（13年5月現在）

校歌

作詞　上島信三郎
作曲　中原　都男

千歳の都
東山
阿弥陀ヶ峯を
仰ぎては
高きいさおを
しのびつつ
鐘のひびきも
清水の
澄みて流るる
心もて
たゆまず学ぶ
うれしさよ

歴代校長

初代	吉野　久志	12代	山本禄太郎	23代	浅野　寅夫
2代	三澤　為忠	13代	岡本定治郎	24代	内藤　久敬
3代	安藤　季誠	14代	吉本　半二	25代	村井　喜一
4代	山口　吉	15代	市川　教一	26代	岸田　良二
5代	成瀬礼三郎	16代	水山　光高	27代	大島　鎮夫
6代	高屋　利吉	17代	福井　尚一	28代	竹原トシ子
7代	嶺田　末雄	18代	大槻　喜一	29代	中　宏
8代	岩瀬　六蔵	19代	倉田　秀雄	30代	藪内美千雄
9代	真下　滝吉	20代	橋本　秀一	31代	奥山　泰治
10代	小林源之助	21代	坂田俊太郎	32代	八木　保
11代	塙　寿次郎	22代	上野　英雄	33代	流山　孝子

学校沿革

明治 2年	下京区馬町通東二丁目下新シ町において開校、下京30番組小学校として発足
20年	小学校令の実施により下京第28尋常小学校となる
25年	京都府京都市修道尋常小学校と改称
35年	児童の増加、村井兄弟商会の拡張等により校舎を馬町通常盤町に移転
39年	明治38年4月8日設立の私立修道児童文庫をうけ、校内に閲覧所を設け児童図書館開館 日本最初の公認児童図書館
昭和16年	国民学校令の施行により修道国民学校と改称
昭和19年	全校児童（879名）に学校給食を実施
22年	教育基本法、学校教育法の実施で京都市立修道小学校と改称
45年	第四回文部省の道徳研究指定校の研究発表
平成 8年	北校舎・南校舎の教室・壁塗装の工事が完了し、コンピュータ室設置（7台）
11年	修道校創立百三十周年記念事業実施　修道ふれあいサロン設置
12年	夜間照明が設置 ＦＬＴペース校になる

学校の特色

運動場の南側はフェンスごしに緑豊かな広大な庭園に面しています。江戸時代の小堀遠州の作庭とも言われ、また平清盛の小松第の庭園とも伝えられています。積翠園と呼び、かつては妙法院の（現在は専売病院）庭の一部でありました。四季さまざまに移りゆく自然の美しさに、心をなごませ憩いの糧としています。

明治39年日本最初の公認児童図書館が開かれて以来今も継続して読書指導に力を入れて取り組んでいます。また、清水焼の中心地でもあり、総合的な学習の時間で陶芸の体験や陶芸についての研究をしています。

校下の特色

校下の生業で今も盛んなものは陶磁器製造です。陶芸の町修道学区は過去現在を通じて有名な陶芸家を数多く輩出しています。そして、かつてはこれに次ぐものとして、扇子、扇骨銅器の製造販売がありましたが、時代の推移とともに扇子業も往年ふるわず銅器に至ってはわずかに残るのみとなっています。

校下の商店街は五条通りをはじめとし、東大路、渋谷の各通りが主であり、そこにはメーカー品の会社、扇子陶器の問屋卸屋、大小の商店、サービス店あり、商店街以外は大部分住宅や学校、学生寮になっています。